

現代日本におけるピアスの普及過程

——新聞および雑誌記事のフレーム分析——

雪村 まゆみ

1 はじめに

近年、服飾文化についての議論においても身体の問題を取り上げることが多くなっている。成実は、「とくにこの十数年間かそこらの間で、私たちの身体観は大きく様変わりしてきた」と指摘し、その変化の要因に「テクノロジーによって身体の改造がとても容易にできるようになったこと」を挙げている（成実 2003a: 7）。また、鷺田は身体とその装飾の関係を考えるときに「身体はつねに加工されており、どの部位をとっても、何の手も加えることなしにそのまま放置してあるところはほとんどない」という事実を念頭に置かなければならないことを指摘している（鷺田 2003: 38）。確かに現在では、直接的にさまざまな方法で身体を装飾する技術が普及しているため、ファッションは衣服の領域にとどまらない。ヘアスタイル、化粧、ダイエット、エステティック、ピアッシング、タトゥ、美容整形など身体を加工、修正、装飾する行為（以下身体加工とする）が手軽にできる環境にある。さらに、成実が「現代ほど身体が消費社会やメディアと結びついた時代はこれまでなかった」（成実 2003a: 12）というように、身体加工は、消費社会によって商品化され、メディアによってその採用が促進され、流行が生まれ、ますます注目を集めた。

フリューゲル(Flugel 1930)は、装飾の形態を身体的なものと外部的なものに二分し、ピアスを身体的な装飾に分類している。しかし、ピアスは身体に直接穴をあけるという点で身体的であるばかりでなく、その穴に埋め込む装身具という点では外部的である。フリューゲルの分類では、ピアスについて身体に穴をあける行為のみに注目されているといえ、装身具という側面は考慮されていないといえるだろう。また、ジンメル(Simmel 1908)は「人間一般を『飾る』すべてのものは、それが身体的な人格と結びついている緊密性にしがたがって、ある目盛りのなかに配列される」としている。ジンメルによると「入れ墨」は、とりかえることができないという点で「無条件に緊密な装身具」である。一方で、「その反対の極は貴金属および宝石の装身具、つまり絶対に非個人的な装身具であり、誰でもがそれを身につけることができる」としている。ピアスは一度身体に穴をあければ、入れ墨がそうであるように、その痕を消失させることは難しいという点で緊密な装身具といえるが、その穴に埋め込む装身具は「絶対に非個人的装身具」である。以上のように、装飾の形態は、身体を直接加工するか、あるいは貴金属や宝石といった外部的な装身具を用いるかという2つの特徴で分類されているといえる。ピアスは、どちらか一方に分類されるわけではなく、身体に穴をあけるという身体加工と、その穴に埋め込む装身具の両方の特徴を含むという点で両義的な装飾の形態と考えられる。

また、「整形も今はピアス感覚？」(『サンデー毎日』 1996.6.9: 25), 「母親が同伴して『中学卒業記念の美容整形』大繁盛—ピアスと同じ感覚で」(『FOCUS』 1997.5.7: 76-7) という記事の見出しにおいて「ピアス」は美容整形等の身体加工を身近に感じさせる装置として用いられているのではないか。従来、ピアスは単に若者のファッションと考えられ、まとまった考察が行われることは少なかった。ピアスの両義性を考慮すると、耳を装飾するイヤリングと同等ではなく、身体にピアッシングを行うという点において他の装身具から区別されなければならないといえる。しかし、日本におけるピアスの普及についての統計的資料はきわめて乏しい。一方で、マスメディアがつくりだす世界において、人の外見、身体、衣服はかなりの頻度で登場する。石田は、その世界で「意味が解説され、やりとりされることを通して、ある種の外見はある特定の文脈の中で記号として機能するように制度化されていく」としている(石田 1998: 160)。そこで、本稿では、ピアスについての新聞および雑誌記事について時代を追って概観する。当然のことながら、これらの記事はピアス普及の実態を直接示すわけではない。特に雑誌記事を分析対象にした場合、各雑誌によって誇張された報じられ方、偏った見方が存在することが指摘されるだろう。しかし、新聞、雑誌といったマスメディアが報じる記事を通して、人々は社会変化を知ることができるのである。同様に、マスメディアにおけるピアスの捉え方、報道のされ方を通して、人々はピアスの社会的認知の変容を知ることができるといえる。マスメディアが報道する情報は人々のピアス採用に影響を及ぼすという点で、少なからずピアス普及の実態に反映されるだろうと考える。

2 先行研究におけるピアスへの視点

ピアスについての先行研究は大学生を対象にしているものが多い(斉藤 1994, 太田 1996, 中村 2000, 喜多 2002)。というのも若者における「現在広がりつつあるファッション的なピアス現象」と指摘されるように、ピアスは、若者を中心に採用されているからである(斉藤 1994: 144)。太田は、「現代、一時的流行に見えていたが『身体』を改造するファッションが案外定着しつつある。ピアス、美容整形、髪を染め脱色する事など、若い人々には抵抗なく受容されている」ことに言及し、医療技術がどこまで身体に介入することが可能かを考察している(太田 1996: 141)。また、15歳から64歳の女性を対象にポーラ文化研究所によって実施されたピアス採用についての調査結果によると、1991年には17%であった採用率が2000年には33%とほぼ倍増しており、20代女性においては56%と半数を越えている(村澤・阿保 2001)。

一方、井上(1996)は、1960(昭和35)年より1996(平成7)年の36年間京都河原町四条の街角に立ち、ネックレス、ブローチ、ペンダント、イヤリングの着用に関する観察調査を実施し、その結果を『アクセサリー流行の軌跡——36年間の街頭調査から』にまとめている¹⁾。そのなかで興味深いのは、着用率の高いアクセサリーの種類の変化である。井

上によるとアクセサリーをつける習慣自体、一般には 1960 年代ごろからはじまった。とりわけ、イヤリングは 1960 年には採用者が全体の約 2% であったが、1996 年には全体の約 33% の人が着用していたという結果が報告されている。この調査では、イヤリングとピアスが区別されておらず、正確にピアスがどれだけ普及したかを確定することはできない。しかし、1987 年には「ピアス人口の伸びと共にファッション化が進む」、1988 年には「ピアスの増加も効果有」と井上も指摘しているように、イヤリング採用者の激増はピアス普及によるところが大きいと推測される。

一方で、ピアスが社会問題として社会的に認知されるのは、ピアッシングが原因で生じる皮膚障害の多発によってである。ピアッシングによる皮膚障害の事例が少数であれば、それに対する医療的対策、ピアッシング技術の革新を求められることはない。しかし、同じ原因から引き起こされた障害が多数報告され、メディアで報じられるとき、それは社会問題となり、その対策が求められるのである。高橋は、このような皮膚障害をピアス皮膚炎とよび、「ピアスの穴から出た滲出液による皮膚のかぶれ（接触性皮膚炎）と、穴の中の化膿からなるピアス特有の皮膚疾患。症状がすすむと金属アレルギーになる可能性もある」と定義している。そして、ピアス皮膚炎の予防と治療に精力的に取り組み、その研究成果を発表する²⁾と同時にメディアにおいても情報を提供している。1980 年代後半から 1990 年代にかけて、医療の現場でもピアス皮膚炎が注目を集めていたといえる。

3 データの概要

本稿では、ピアス普及の分析対象として戦後五十五年間の「朝日新聞」記事データ³⁾と「大宅壮一文庫」⁴⁾を選択した。まず、「ピアス」についての記事の趨勢を見るため、『朝日新聞戦後見出しデータベース 1945～1999』（朝日新聞社編、二〇〇〇年）を用い、「ピアス」に関する記事を検索した。キーワードとして「ピアス」のほかに「イヤリング」⁵⁾を選択した。得られた記事件数は 26 件⁶⁾となった。次に『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM』（1982-2001）⁷⁾を用い「ピアス」をキーワードに「ピアス」に関する記事を検索した。得られた記事件数は 227 件⁸⁾となった（図 1）。図 1 が示すように、「ピアス」に関する記事がメディアに初めて登場したのは 1972 年 9 月 13 日朝日新聞朝刊である⁸⁾。記事の見出しは「耳に穴あけるなんて…イヤリング論争」であった（この記事を以下では「イヤリング論争記事」とよぶ）。「ピアス」ではなく、「イヤリング」という言葉が使われていることに注目されたい。「ピアス」という言葉自体が一般に認知されていなかったことが示唆される。全体的な記事数の変化を概括すると、新聞記事数の増減に大きな変化はみられないが、雑誌記事数においては、1980 年代後半から急激に増加し始め、1998 年、1999 年には、それぞれ 27 件、23 件とピークを迎えている。

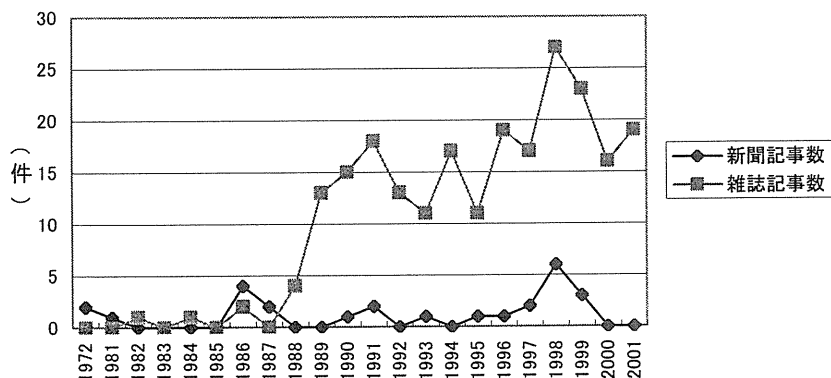


図1 ピアスに関する記事の経年変化

4 分析

4.1 ピアスに関する記事の典型的タイプ分類

検索結果に基づき、すべての新聞（26 件）および雑誌記事（227 件）を入手した。収集・整理された情報を素材に、問題をめぐる全体状況の分析を行うために、記事内容を分解して、そのエッセンスを取り出した。それらを KJ 法のグループ編成法を援用して分類した。以下では、いくつかの典型的記事内容をみてみよう。

4.1.1 過激な行為としてのピアッシング

「イヤリング論争記事」に象徴されるように、1972 年当時は耳たぶに穴をあけることを過激な行為と捉える風潮があった。記事中には「耳に穴をあけてはめるイヤリングが最近、若い女性の間で静かなブームを呼んでいる」と記述され、若者の流行の一つとして捉えられている。記事の論点は、自分で耳たぶに穴をあけ、24 金ピアスが同時にセットされるコーレンという米国製の製品を美容店で販売することの是非である。業者側は、「ピアスがはやり始め、一般の人は氷で耳を冷やし針で穴をあけるといった危険なことをしている」、「日本にはピアスの伝統がないので騒ぐ。正しい安全なおしゃれを普及するのがこちらの使命」と、米国で 2 百万人が愛用し障害がゼロのコーレンを販売する必要性を主張している。これに対して、当時の厚生省は「人体に穴を開けるような器具を、素人に説明したり、指導して売るのは、医師法 17 条（非医師の医業禁止）に違反する」という見解を示したため、兵庫県および大阪府の衛生部は美容店でのコーレンの販売禁止を通達している。

4.1.2 ピアッシング実践講座

1980 年代に入ると女性雑誌では、ピアッシングの方法やピアッシング体験談など、ピアッシングの普及に貢献する特集が組まれ始めた。このような特集記事を「ピアッシング実

践講座」とよぼう。1982 年、『anan』⁹⁾が先駆けて「今ひとつ勇気がなくて…という人へ。体験・ピアスする。」という見出しでピアス体験を 6 ページにわたり特集している。冒頭は次のようである。

アクセサリ店をのぞいてみて、最近、ピアスが充実してきたなあ、って思います。ピアスをチャームポイントにする女性もふえてきたし、モデルやスタイリストの間では、2 個も 3 個も付けてピアスのコーディネートを楽しむおしゃれも、流行中。ピアスへの関心が高まってきている。でも興味はあるんだけど、今ひとつ勇気がなくて…と思いとどまってしまう人もいます。痛さへの恐怖はもちろんのこと、あけたら運命が変わるかもしれないとか、耳のツボをヘンに刺激して体調が悪くなったらどうしよう…。そんな気持ちと好奇心の間で、女心はグラグラ揺れてしまう。思い切ってピアスするか、やっぱりヤメタとしりごみするかは、その人の勇気と度胸しだい。(『anan』1982.3.19: 79)

このように、モデルやスタイリストといったファッションリーダーがピアスでおしゃれを楽しんでいることを強調し、新しい流行に乗り遅れるなといわんばかりにピアッシングを読者に勧めている。なかには、ふとん針や裁縫の針であけたというエピソードも紹介され、その気楽さがうかがえる。一方で、この特集では、読者の一人が実際にピアッシングを体験し、その様子が詳細にレポートされている。そして「ピアスのできる病院」の紹介と各病院での必要経費等を記載している。料金は病院によっても異なるが、掲載されている料金で最も安価な例でも、スタッド（ピアッシングに用いる専用ピアス、一般にファーストピアスと呼ばれている）とピアッシングで 10,000 円の費用がかかり、最も高い例においてはピアッシングのみで 25,000 円とかなり高額であることが示されている。ピアッシングは自分あるいは友達同士でふとん針等を用いて行う方法と、病院でピアスガン（スタッドをつけてピアッシングするための器具）を用いて行う方法とが選択可能であるとされている。このように、記事全体として、適切な穴あけ方法を示すことによって若い女性が抱いている穴を開けることへの不安感をとりのぞく、という内容になっている。

1989 年には「私かわいいピアスに凝ってます！」(『non・no』1989.7.5: 230-5)、1990 年には「大人のエレガンス ピアスにしてみたら」(『With』1990.1: 319-24)、「思いきって、ピアス美人！」(『MORE』1990.12: 12-21)と女性ファッション雑誌でピアッシングについての特集がくまれた。特に『non・no』では「ちょっと気になる、私のからだ 『ピアッシング』」(1991.12.5: 232-33)、「これで安心！初めてのピアス」(1992.10.5: 73-8)、「初心者のための安全ピアス(1993.11.20: 71-7)」、「良いピアス、悪いピアス(1996.04.05: 135-41)」というように、定期的に安全なピアッシング方法について特集されている。このようなファッション雑誌での特集記事の特徴としては、ファッションリーダーである芸能人が自らのピアッシングのきっかけやその方法、ピアスのコレクションについて語る部

分と、医師が金属アレルギー等に言及し、安全なピアッシングの方法を啓蒙するという部分で構成されていることがわかる。

4.1.3 ピアス皮膚炎への危惧

安全なピアッシング方法の啓蒙は、1980年代後半より、ピアス皮膚炎という障害が増加傾向にあり、マスメディアを通して報道されはじめたことによるところが大きい。1993年6月2日の朝日新聞朝刊によると、ピアスの被害件数が1975年から1993年3月までに87件あったことが国民生活センターの調査でわかったと報告されている。これによると、被害にあった年齢層は10代、20代でほぼ8割を占め、被害のほとんどが耳たぶの出血、穴周辺のかぶれ、金属アレルギーなどの皮膚障害であった。雑誌記事でも、たとえば、「ピアスが耳に埋まっていく！怖い！あなたは大丈夫！？違法穴あけによる事故急増！」（『女性自身』1990.4.24: 70・1）、「警告レポート！ピアス人口500万人あなたは大丈夫？あけた穴から金属アレルギーに！」（『女性セブン』1993.10.28: 246・9）というようにピアッシングによる皮膚障害の危険性を警告している。

4.1.4 都市伝説

メディアは若者文化の新しい身体装飾を社会問題としてとりあげたり、新しさゆえにその技術の未熟さや情報の欠如および不正確さから、さまざまな被害を報じたりする。またそれに付随して都市伝説¹⁰が生み出された。たとえば、1989年『明星』では、ピアスの孔から白い糸が出てきてそれを抜くといきなり目が見えなくなるという「ピアスの白い糸」の話が紹介され、その話は1988年ごろから急速に広がり始めたとされている。また、記事中において医師である松村は、当時「日本でのピアス普及率は1割程度」で、「ピアスへの恐怖感も根強」かったと指摘している（『週刊明星』1989.5.4: 217・9）。この恐怖感がピアス伝説を生む要因となったと考えられる。しかし、これらの記事は女性週刊誌やファッション雑誌においてピアスの実践講座とともに構成されていることが多い。前述したように、井上は1988年には「ピアスの増加」を指摘していることから、ピアス伝説は正しいピアッシングの方法を啓蒙し、結果的にピアス普及を促進したと考えられる。

4.1.5 中高年女性のピアス採用—若さの象徴としてのピアス

1990年代後半には40代、50代の母親層にもピアスの普及が及んだことは、新聞の投書欄から推察できる。子育てに一段落つけ、第2の人生を歩む記念として、ピアスをするといった投書が多くみられた。

私もいよいよ四十代。子育ても一段落し、新たに自分探しを始めなくてはならない。人生の節目に、何か弾みをつけたい——それが一番の動機だったような気がする。
（『朝日新聞』1996.12.9 朝刊）

50歳のピアス、私の場合、これからの人生に向かったの記念のおしゃれです。（『毎日新聞』1998.6.3 朝刊）

このように次の年代への希望をピアスに象徴的に投影していることがわかる。付随して、イヤリングの短所とピアスの長所を装着方法から言及しているものが多い。例えば、イヤリングの短所については長時間装着していると耳が痛くなることや、落として片方なくしてしまうといったこと、あるいは、ピアスの長所として小さいアクセサリなので日常的におしゃれが楽しめるといったことが挙げられている（『朝日新聞』1995.7.13 朝刊など）。また、49歳の母親が「いくつになっても新しい自分でいたいという心意気」をピアスによって表現しているという投書（『朝日新聞』1997.3.4 朝刊）や、ピアスによって「ちょっと若返ったかな」という「気分」が綴られている50歳の女性の投書（『毎日新聞』1998.6.3 朝刊）があった。このようなピアス採用の「心意気」や「気分」から、40代、50代の中高年女性におけるピアス採用は、若さ志向¹¹⁾が大きな要因となると考えられる。当時、若者のサブカルチャーの一つと捉えられていたピアスは、「若さ」という理想像によって肯定的に評価されたと考えられる。ピアスが商品として成立し、年齢にかかわらず採用することができるため、それを購入・消費することをおして若さ志向を実現することができるのである。

4.1.6 著名人のピアス採用—革新の象徴としてのピアス

『ピアス似合うでしょ』37歳大臣『野田聖子』（『FOCUS』1998.8.26: 66-9）や「茶髪、ピアスの現代ふう若者は信念強き市会議員」（『週刊大衆』2000.2.07: 144）といった記事に見られるように、ピアスは、大臣、市会議員といった従来保守的とされていた職業に新風がふいていることを示すものとして象徴的に捉えられている。また、「私はピアスのサウスボー」アメリカ女子プロ野球に挑む21歳（『FOCUS』1998.5.27: 60-1）、「野球茶髪にピアスは変身と自己主張の表れ」（『ダカーポ』1998.7.15: 26）、「スポーツ肉体主義彼女がピアスにした理由」（『Number』1995.7.20: 64-5）といったスポーツ選手のピアスに注目し、彼らの身体的特徴としてあげられている記事も多くみられた。これらの記事では、ピアスは革新的あるいは自己改革といった内面性を表出する装身具として肯定的に捉えられているといえる。

4.1.7 中高生のピアス採用—校則に対する逸脱の象徴としてのピアス

ピアシング技術が安定し、若い女性のみならず幅広い年齢層にピアスが普及すると、中高生のピアスが茶髪と並んで、校則との対立問題として社会問題に発展した。1996年6月から11月にかけて、毎日新聞上で、茶髪やピアスの採用は生徒たちの自主的な判断に任せるべきで、大人や校則が禁止すべきではないという意見と、集団生活に順応するため

に校則で規制すべきであるという意見とが対立している。当時、社会意識の底流のひとつとして「人々の意識が『公』重視から『私』尊重へと変わり、生きる意味や価値を私的な生活世界のなかに求める傾向が強まること」(『毎日新聞』96.9.26)が指摘されている。自分らしさを重視する価値観は学校での服装や髪型の自由化を促し、若者の流行を黙認したといえるだろう。しかし、ピアスは「高校生の事件多発！いまだきの不良スタイルはロング茶髪にピアス」(『女性自身』1996.8.27:66)というように、しばしば中高生の逸脱スタイルの象徴として捉えられていた。

4.1.8 職場におけるピアス採用—職場の着装規範に対する逸脱の象徴としてのピアス

ピアスは低年齢化しただけでなく、男性にもその採用が普及した。たとえば、1991年2月27日の毎日新聞朝刊では、男性のピアスについてとりあげられていた。ここでは、ファッションについて男女の境界があいまいになりピアスが若い男性のあいだでも流行していると伝えられている。東京・渋谷のファッションビル内で診療所をもつ外科医師は「耳たぶに穴などを開けにくる男性は5、6年前から増えだした」という。職場での着装規範の関係では、朝日新聞で1998年4月に、「男性社員のピアス」というテーマで特集されている。そこでは、職場でのピアスが茶髪や髭と並んで、着装規範と個性化の対立問題としてとりあげられている。さらに、「ピアスは?カイシャの『規制緩和』はどこまで進んだか!?(『週刊宝石』1996.6.13:76-81),「企業リサーチ ホントの社内自由度がわかる!?(『DIME』1996.11.21:93)では企業に茶髪、ピアス、ひげなどが職場の着装規範に合致するのか、その現状を調査している。一方、「ピアス・カン違い・遅刻・融通がきかない若手社員たち」(『週刊ポスト』1998.5.15:88-92),「『上司と部下』の人間関係学 茶髪・コギャル・ピアス社員はこう使う」(『プレジデント』1999.4:78-85)というように社会人としての自覚のない社員を形容する言葉としても用いられている。このように、一部の男性のあいだでピアスが流行し、職場の着装規範も緩やかになってきている一方で、ピアスが職場の着装規範に沿わないものであると捉えている企業も多いことが指摘されている。

4.2 ピアス普及とフレーム分析

以上のように、記事は①過激なピアッシング、②ピアッシング実践講座、③ピアス皮膚炎への危惧、④都市伝説、⑤中高年女性のピアス採用、⑥著名人のピアス採用、⑦中高生のピアス採用、⑧職場におけるピアス採用の8つに分類することができた。この分類によって日本社会におけるピアスへのまなざしを理解することができたが、次の二点が考慮されていない。一つは、ピアスの両義性である。つまり、前述したようにピアスは身体に穴をあける行為とその穴にはめられる装身具といった両義的な装飾の形態といえるため、ピアッシングという身体加工の側面に焦点があてられているか、ピアスという装身具の側面に焦点があてられているかという「身体加工—装身具」軸で記事の類別が可能となるはずである。もう一つは、マスメディアにおけるピアス普及の報道のされ方である。前述した

ように、ピアス普及の実態にはマスメディアの報道が反映されると考えられ、ピアス普及を促進するか、あるいはピアス普及に懐疑的か、といった捉え方について視野に入れる必要がある。したがって、ピアス普及に対して「促進的—懐疑的」軸で記事類別を行うことが可能となると考える。本稿では、約 120 誌におよぶ雑誌を対象に記事検索を行っており、性別、年齢、ライフスタイル等の異なる雑誌におけるピアス普及の報道のされ方を網羅的に検討しているといえる。

メディアは無数の出来事から選択的に報道を行うために出来事の解釈枠組みすなわち「フレーム」を用いる。生じた出来事の中から強調や排除を行い、出来事の理解を助けていることから、このような解釈のパターンはメディア・パッケージやフレームと呼ばれている。ゴフマンのフレーム分析(Goffman 1974)に由来する概念である「フレーム」とは、日常生活の相互行為における無数の出来事を位置づけ、認識するための枠組みである。ゴフマンの論じるフレームについて、安川は「それ自体は意味をもたないむきだしの出来事の流れを、なんらかの組織だった意味あるシーンへと経験させる、経験の組織化の前提、もしくはその『原理』であり」、フレームが適用されると、「一見して雑多な経験断片群が相互に位置と関係を得、カテゴライズされて関連する活動のなかで 1 個の経験へとまとめあげられる (安川 1991: 10-1)」としている。したがって、この概念は新聞記事などのメディア報道を解釈するのに応用することができるのである (例えば、川北 2003)。本稿においても、ピアスに関するメディア報道について一定の解釈をもたらす基盤となる枠組み、つまり「身体加工—装身具」、普及に対して「促進的—懐疑的」の二軸を設定する。以下では、記事データに基づき、ピアスの社会的認知に関する 4 つのフレームについて論じたい。これら 4 つのフレームは現実には混交して経験され、どのように連動し、ピアスの普及を枠づけているのかを明らかにしていく。

①過激なピアッシングでは、ピアスは身体を傷つけるという考え方から、ピアッシングを過激な身体加工として否定的に評価した記事が集合している。また、③ピアス皮膚炎への危惧では、ピアッシングが原因で生じる皮膚障害についての危険性のみを強調した記事が集合している。これらは、「身体加工」および「懐疑的」の枠組みで捉えることができる。②ピアッシング実践講座、④都市伝説では、安全なピアッシング方法の啓蒙、ピアッシング器具の開発、ピアス皮膚炎の予防と治療などに関する記事が集合している。これらは、女性ファッション雑誌を中心にピアッシング技術の確立として掲載されており、「身体加工」および「促進的」の枠組みで捉えることができる。⑤中高年女性のピアス採用、⑥著名人のピアス採用では、中高年女性など幅広い年齢層への普及に関する記事や、さまざまな職業につく人々のピアスを肯定的に捉えた記事が集合している。同時に、芸能人やスポーツ選手がライフスタイルの一環として、自分のピアスを紹介している記事が集合している。これらは、外面的な自己表現として装身具であるピアスを象徴的に用いており、「装身具」および「促進的」の枠組みで捉えることができる。一方、⑦中高生のピアス採用、⑧職場におけるピアス採用では、校則や社則といった規則に対する逸脱としてピアスが捉えら

れている記事が集合している。これらは、ピアス普及に懐疑的な者の視点で学校や職場における着装規範の逸脱の象徴としてピアスを捉えているといえる。つまり、「装身具」および「懐疑的」の枠組みで捉えることができる。以上のことから、各フレームを(1)「ピアッシングの危険性」、(2)「ピアッシング技術の確立」、(3)「自己表現ピアス」、(4)「逸脱ピアス」と名づけた(表1)。

表1 ピアスの社会的認知についてのフレーム分析による記事分類

	ピアス普及に対して促進的	ピアス普及に対して懐疑的
身体加工 (ピアッシング)	(2)「ピアッシング技術の確立」 フレーム ②ピアッシング実践講座 ④都市伝説	(1)「ピアッシングの危険性」 フレーム ①過激なピアッシング ③ピアス皮膚炎への危惧
装身具 (ピアス)	(3)「自己表現ピアス」フレーム ⑤中高年女性のピアス採用 ⑥著名人のピアス採用	(4)「逸脱ピアス」フレーム ⑦中高生のピアス採用 ⑧職場におけるピアス採用

次に4つのフレームから、ピアスの社会的認知について通時的に検討する。各フレームにおける雑誌記事数の年別推移を図2に示す¹²⁾。

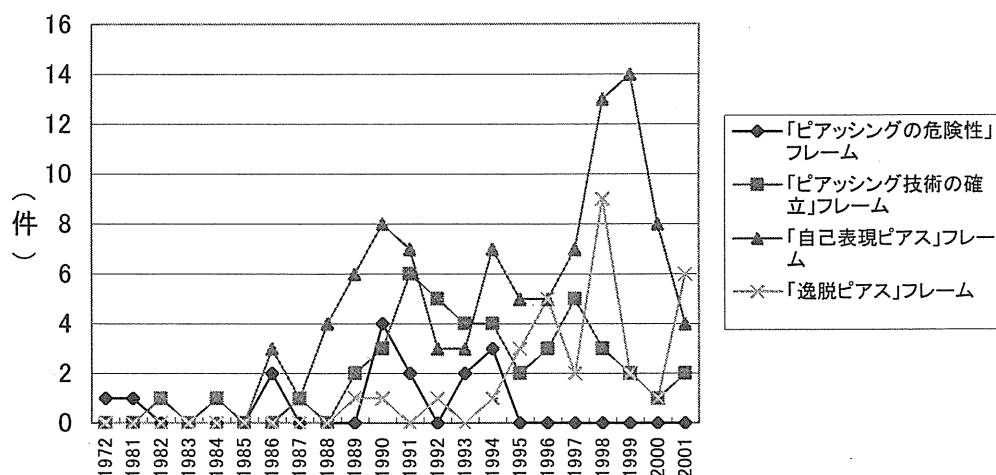


図2 フレーム別記事数の経年変化

まず、台頭するのが「ピアッシングの危険性」フレームである。1972年の「イヤリング論争記事」には、『「ピアス」一耳に穴をあけてはめるイヤリングが最近、若い女性の間で静かなブームを呼んでいる』と記述されているように、このような新しい形態の装飾の普及の初期段階では、若者のサブカルチャーもしくは一時的な流行現象として新聞や雑誌と

いったメディアを媒介として報じられる。ヘブディジ (Hebdige 1979) が指摘しているように、若者の「サブカルチャー・スタイルは、ファッションの項目では賞賛され、サブカルチャーを社会問題とする記事では拒否されるというように二重の反応を引き起こす」のである。しかし、図 2 に示されるように、95 年以降、ピアス普及における阻害要因の一つであった「ピアッシングの危険性」フレームに類別される記事はみられなかった。

「イヤリング論争記事」から 10 年後、女性ファッション雑誌においてピアッシング実践講座が特集されたが、若者のサブカルチャー的なイメージが強かったといえる。1980 年代後半には、医師によって日本人用に開発されたピアッシング器具が開発され、ピアッシング技術が確立された。女性ファッション雑誌においても、ピアッシングを行う病院の紹介やピアッシングにかかる費用等、安全なピアッシング方法の啓蒙に焦点が当てられた記事構成であった。このような「ピアッシング技術の確立」フレームは、1980 年代後半から徐々に増加し、1990 年代初頭にかけて割合が大きかった。特に 1990-92 年には高橋によるピアッシングによる皮膚障害の予防と対策についての記事が多く、医師による「ピアッシング技術の確立」によって、人々は安全にピアッシングすることが可能になったといえる。1972 年、ピアッシングを医師法によって規制したことは、かえって普及が促進する要因になったといえるだろう。採用者が若者に限定されなくなると、中高年女性や、従来はピアスをしないと考えられていた職業の人々のなかにもピアス採用者があらわれ、彼らの身体的特徴として注目された。「自己表現ピアス」フレームは 1990 年以降、他のフレームを牽引するように登場している。装身具としてのピアスは若さや革新の象徴として肯定的に捉えられたのである。一方で、1990 年代後半には、職場でピアスをしている男性や中学校や高校でピアスをしている中高生に対して職場や学校の着装規範を問い直す文脈で、社則や校則に対して逸脱の象徴として捉えられていた。「逸脱のピアス」フレームが「自己表現ピアス」フレームと共存するかたちで登場するのである。ここで、ピアスの身体加工（ピアッシング）-装身具（ピアス）軸について記事の経年変化をみてみよう。

図 3 に示すように、装身具にかかわるフレームの記事が増加し、逆にピアッシングに焦点を当てている記事は減少していることがわかる。かつて、ピアッシングが過激な行為と捉えられた背景には「身体に傷をつけることへの否定的な考え方」や「ピアス皮膚炎への危惧」があった。こういったピアス普及の阻害要因は、1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて確立されたピアッシング技術によって消失したといえよう。そして、ピアスは自己表現、ときには逸脱の象徴として認知されるようになった。ピアスが自己表現か逸脱かといった判断は、採用者の動機と関係すると同時にピアス装着の規範にもとづくと考えられる。つまり、耳へのピアスは身体加工というよりは装身具の着装規範についての問題に移行したことが示唆される。

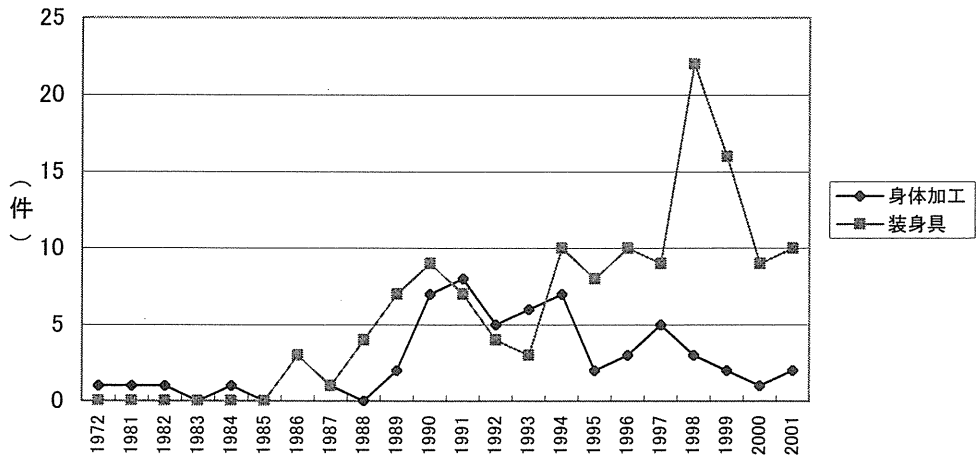


図3 身体加工（ピアッシング）－装身具（ピアス）軸による記事数の経年変化

4.3 身体加工の多様化

本稿の分析対象は耳ピアスに限定したが、1990年代前半には、身体に穴をあけて装身具を埋め込むという形態をとる装飾は、身体加工という側面で多様化を経験する。たとえば、耳たぶ以外に多くのピアスをしたり、穴を拡張するピアスをしたりと、ピアスのバリエーションが多様になった。これらはボディピアスとよばれ、耳たぶにひとつずつ行われるピアスと区別され、タトゥなどの他の身体加工と同様に過激な身体加工としてメディアでもたびたびとりあげられている。図4には、「身体加工－装身具」軸による記事数の経年変化に合わせて、「ボディピアス」に関する新聞および雑誌記事数の経年変化を示す¹³⁾。「身体加工」記事の減少に反比例するように「ボディピアス」記事が増加している。つまり、耳へのピアスにおける身体加工の側面への注目の減少によって、新たな身体加工がメディアで注目されたと考えられる。

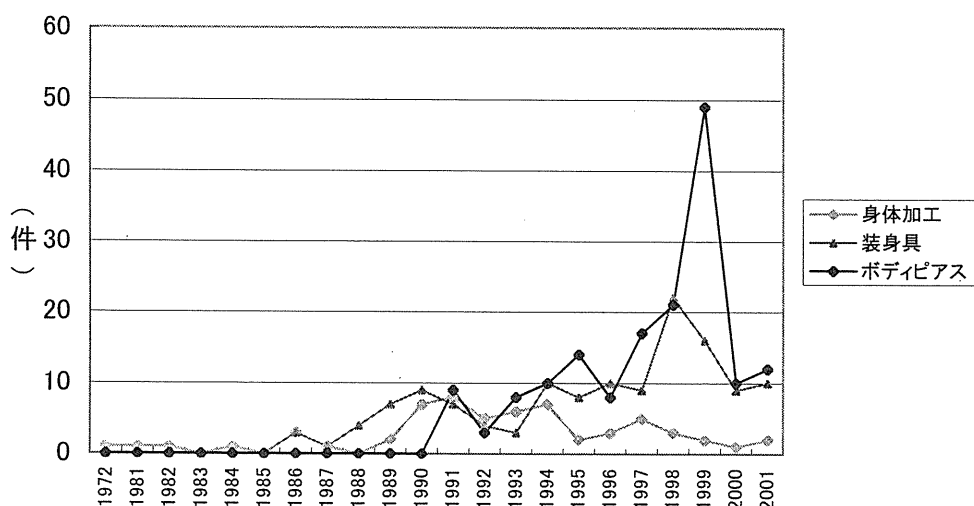


図4 身体加工，装身具，ボディピアス記事数の経年変化

5 おわりに

最後に、ピアスの普及過程と各フレームの主要な登場年代を示す(図5)。ピアス普及過程は、おおよそ1970年代から80年代前半、80年代後半から90年代前半、90年代後半以降の3段階で説明できるが、各フレームが台頭してくる年代とピアス採用者の属性に焦点を当てることによって、若者のサブカルチャー的な存在であったピアスがいかに社会的に認知され、幅広い層に普及したかを描くことが可能である。

以上の分析から、ピアスに関する議論は1970年代後半以降多くなされ¹⁴⁾、十分社会的に認知されたといえる。「技術確立」「自己表現」と「危険性」「逸脱」というピアス像については、一方は普及を促進、もう一方は普及に懐疑的である点で一見正反対である。しかし、広範な人々によって議論されるピアスは、若い女性を対象として消費社会に組みこまれたファッションであるばかりでなく、自己表現と逸脱という側面から個人の内面と密接に結びつき、その採用は外面を装飾することのみが目的ではないことが明らかになった。石田は、現代における人々の外見のこだわりについて、「消費社会の文化の進展とともに、身体や服装、持ち物などが記号化し、微妙な差異に決定的な意味が付与されてやりとりされるという状況」を指摘し、「青年というある特定の世代・年齢層を対象にした視点よりは、むしろ、年齢や性別を問わず外見への関心が高まってきた時代ととらえることが妥当だろう」と示唆している(石田1998:141-2)。ピアスについての先行研究は大学生を対象にしたものが多かったが、ピアス採用者は大学生を代表とする若者に限られないし、採用動機等に焦点をあてピアス普及と社会の変化を検討するためには、大学生以外の層も対象にす

べきである。本稿で分析の対象とした新聞および雑誌の読者層の多様性は、従来のピアスに関する研究では考慮されていなかった層におけるピアスの普及についても明らかにすることができた。身体加工は、もはや若者のサブカルチャーの範疇を越えていると考えなければならないだろう。

また、耳のピアスにおける身体加工の側面への注目が減少することによって、装身具の側面へ人々の関心が移行すると同時に、身体加工の側面での多様化が導かれることが示唆された。本稿で分析されたピアスの普及過程は、ある身体加工が社会に浸透し、その身体加工の側面への注目の減少によって、新たな身体加工が台頭してくるというように身体加工全般の普及を考えるうえで有用なモデルとなるといえるだろう。例えば、入れ墨の普及についてこのモデルを適応してみると、入れ墨が社会に浸透することにより、その身体加工の側面への注目というよりは、むしろ、彫られる絵柄のデザインに人々の関心が移行すると考えられるのである。もっとも、入れ墨の場合は、身体加工の側面への注目の減少による絵柄への関心という図式が簡単には成立しないのは、ピアスのように身体加工と装身具という両義的な装飾の形態ではないためではないだろうか。ボディピアスを含めてピアスは一見過激のようにも思えるが、他の身体加工よりも社会に浸透しやすいのは、装身具を外すことによってその採用を隠蔽することができるからである。ピアスを装着したり外したりする場面、つまりピアス装身具の着装規範の問題について検討することが今後の課題である。

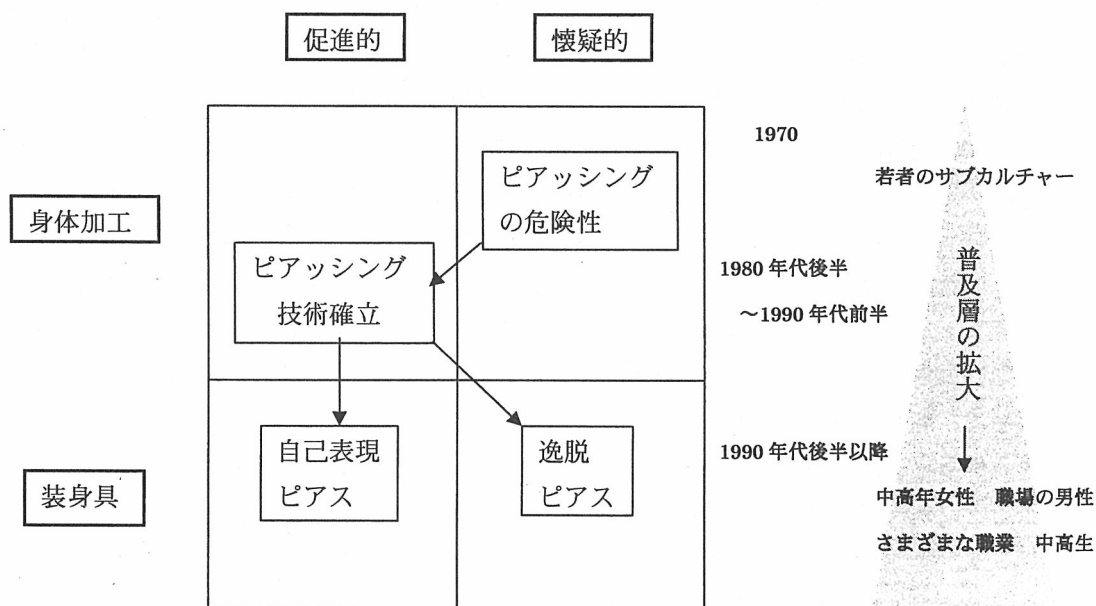


図5 ピアス普及過程におけるフレームの位置づけと普及層の拡大

[注]

- 1) 井上は、3 週間間隔で土曜日の 3 時から 5 時の時間帯で洋装をした成人女性を対象に 1 回につき 1,000 人ずつを調査した。その結果、調査対象者は延べ 613,000 人となった。なお、京都でも本調査の前に東京、大阪をはじめいくつかの大都市で、何年かの間、予備調査を行っている。そして各地での調査データを比較検討し、東京、大阪と京都で大差がないことを確認している。
- 2) 例えば、「シリコンリングを用いたピアスによる炎症性合併症の治療」では、ピアス皮膚炎の患者に対して、医療用シリコン製のリングピアスを用いて穴をふさがずに治療する方法を考案し、さらに「最初の穴あけ手術にも安全に用いることができる」ことを報告した（高橋 1991）。また、「ピアス希望者に対する耳垂厚の測定」では、従来のファーストピアスの軸の長さが欧米の基準である 6 ミリメートルでは、日本人の成人には短すぎることを指摘した。高橋によると「日本国内で使用されている医療用ファーストピアスは全て欧米からの輸入品であり現時点では国産品は存在」せず、「欧米では小学校に上がる頃にはピアッシングが終了していることが多い」ため、輸入品のファーストピアスの軸部分はこどもの耳たぶの厚さに合わせて短いという。その結果、ピアスの留め具が耳たぶに埋まったり、十分な消毒ができなかったりしてピアス皮膚炎をひき起こすことを指摘した（高橋 1996）。
- 3) 本稿において、量的分析には朝日新聞データのみを用いたが、質的分析においては、必要に応じて毎日新聞記事を引用した。
- 4) 大宅壮一文庫は、約 1 万タイトルの雑誌を所蔵していて、約 120 誌において記事索引を利用できる。
- 5) ピアスが採用され始めたころ、イヤリングとピアスは明確に区別されていなかった。
- 6) 得られた記事件数は、新聞記事 30 件、雑誌記事 384 件であったが、ここでは耳たぶに行われるピアス記事のみを対象とした。耳たぶ以外に行われるピアス（いわゆるボディピアス）については、4.3 以降に言及する。
- 7) 1982 年以降は「大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM」で検索可能であったが、1981 年以前の記事に関しては、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録－明治－1984 年』（大宅壮一文庫、一九八五年）を用い「世代」「おんな」の項を検索した。その結果、「ピアス」が見出しとなっている記事は存在しなかった。
- 8) 1950、60 年代の記事は、ねじ型、クリップ型といった耳朵をはさむ方法で装着するイヤリングで、耳に穴をあけて装着する方法は一般に用いられなかったと推測される。たとえば 1950 年代では「大きくなったイヤリング アクセサリーの美学」（『朝日新聞』1954.11.13 朝刊）という見出しで、イヤリングのつけ方を、また、1966 年の「イヤリングをどうぞ 髪型と服装との調和を考えて」（『朝日新聞』1966.10.11 朝刊）という見出しで、髪型や服装とのコーディネート の 仕 方 を 伝 へ て い る。
- 9) 『anan』は、1970 年創刊の若い女性向きファッション雑誌で、その読者層は『non・

no』の読者層と合わせて「アンノン族」と呼ばれるほど、当時の若者のファッションあるいはライフスタイルに影響力を持っていた(岡本 1997: 104).

- 10) 池田(1994)は『ピアスの白い糸』という著書において日本の現代都市伝説をまとめている。他の都市伝説も扱われているのにもかかわらず、題名に『ピアス』が用いられていることから、ピアスが詳細のわからないまま急速に普及したことが示唆される。共著者の一人である渡辺節子(不思議な世界を考える会主催)は「変な話だけどそれも時代。忘れ去られないうちに記録を」というのがきっかけで、当時の大学生らの噂話を聞き書きしたという。「ピアスの認知度がこれだけ高くなれば、そんなので怖がる人はいないでしょう。」と語ったが、高橋氏のホームページには「中学卒業記念であけたいけど目が見えなくないませんか」という問い合わせはなくなるという(青木 2003: 82).
- 11) 新居(2003)は、欧米にみられた若さ志向は、1960年代に様々な分野で大量生産システムが完成して本格的な大衆消費社会が到来したときに一般化したことを指摘し、10代になった団塊世代との関連を強調している。1960年代のミニスカートブームは、若々しい身体を賞賛する「ボディコンシャス」の具現化であり、若々しい身体そのものへと注目の対象が移ったという。そして、ファッションにおける若さ礼拝について、「若くみせたいというすべての女性の願望によって」(『ハーパーズ・バザー』誌(英)1926),「若々しいシルエットが唯一の流行となるでしょうから身体を引き締めましょう」(『ヴォーグ』誌(英)1928),「マダム、永遠の美と若さを」(『フェミナ』誌(仏)1962)など、海外のファッション誌の記述を引用し、ファッションのキーワードが「若さ」となることを指摘した。同様に成実も、団塊世代は音楽やファッションなど若者独自のサブカルチャーを発信しはじめ、成熟した大人らしさが時代遅れとなり、かわって「若さ」という価値が認められるようになったと指摘している(成実 2003b: 26-31).
- 12) 装飾品のカタログ、書評、映画評、曲名、見出しにピアスという言葉が用いられているが本文の内容がピアスに関連しない記事などは4つのフレームに分類せず、その他として扱った。
- 13) ボディピアス記事は、新聞記事4件、雑誌記事157件であった。
- 14) ピアスをはじめて全国的に売り出されたのは1960年代後半であると考えられる。日本で最初にピアスを扱った店としてかたられているスタージュエリー(スタージュエリーホームページ)は、1968年より全国の百貨店に期間限定で出店した(横浜市 2003: 266-7).

[文献]

青池里佳, 2003, 「都市伝説探偵団 伝説1 ピアスの糸で失明」『AERA』2003.5.26.

- 新居理恵, 2003, 「ファッションにみる若さ礼拝の系譜」『化粧文化』ポーラ文化研究所: 12-9.
朝日新聞社, 『朝日新聞戦後見出しデータベース』1945～1999 (CD-ROM).
- Dick Hebdige, 1979, *Subculture: The meaning of Style* Methuen & Co. Ltd, London.
(=1986, 山口淑子訳, 『サブカルチャー——スタイルの意味するもの』未来社.)
- Flugel, J. C., 1930, *The psychology of clothes*, London: Hogarth Press.
- Goffman, E., 1974, *Frame Analysis* Harper.
- 池田香代子, 1994, 『ピアスの白い糸——日本現代伝説』, 白水社.
- 井上早苗, 1996, 『アクセサリ 流行の軌跡——36年間の街頭調査から』五十鈴.
- 石田佐恵子, 1998, 『有名性という装置』勁草書房.
- 川北稔, 2003, 「遊びをめぐるリスク管理観の変容——戦後五十五年間の「朝日新聞」記事データを用いて」『社会学評論』: 57-72.
- 川喜多二郎, 1986, 『KJ法』中央公論.
- 喜多エイ子, 2002, 「若者の生活意識とファッションに対する態度」『羽衣学園短期大学研究紀要』38: 33-8.
- 村澤博人・阿保真由美, 2001, 「アンケートにみる過去10年間のピアス着用率の変化『おしゃれ白書1991～2000』より」
(<http://www.pola.co.jp/company/culture/bunken/pdf/pierce.pdf>, 2003.7.22).
- 中村俊哉, 2000, 「髪髻・ピアスと西洋化に関する文化心理学」『福岡教育大学紀要』第49号第4分冊: 229-37.
- 成実弘至, 2003a, 「身体モードとしてのファッション」成実弘至編『モードと身体』角川書店.
- , 2003b, 「美しいからだは心を癒す」『化粧文化』ポーラ文化研究所.
- 日本ピアスシステム HP, http://jps.ac/index_nswf.html(2004.11.5)
- 岡本木綿子, 1997, 『チャートでみる日本の流行史』株式会社パルコ出版.
- 太田妙子, 1996, 「日本の若者の身体観の変容」『大阪外国語大論集』15.
- 大宅壮一文庫, 1985, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録—明治—1984年』
- , 1999, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 1988—1991』(CD-ROM).
- , 1997, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 1992—1996』(CD-ROM).
- , 1998, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 1997』(CD-ROM).
- , 1999, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 1998』(CD-ROM).
- , 2000, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 1999』(CD-ROM).
- , 2001, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 2000』(CD-ROM).
- , 2002, 『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 2001』(CD-ROM).
- 斎藤光, 1994, 「増殖するピアスの身体」『京都精華大学紀要』7.
- Simmel Georg, 1908, *Sociologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Dunker & Humblot.(なお, 翻訳については以下を参照した. 1979,

居安正訳、『秘密の社会学』世界思想社。）

スタージュエリーHP, <http://www.star-jewelry.com/history/h1946.htm> (2003.11.26)

高橋知之・高橋真理子, 1991, 「シリコンリングを用いたピアスによる炎症性合併症の治療」『臨床皮膚科』第45巻 第12号: 1009-12. 高橋知之, 1996, 「ピアス希望者に対する耳垂厚の測定」『日本美容外科学会会報』第18巻 第3号: 8-12.

鷺田清一, 2003, 「意識の皮膚——ファッションと身体」成実弘至編『モードと身体』角川書店.

安川一, 1991, 『ゴフマン世界の再構成』世界思想社.

横浜市総務局市史編集室, 2003, 『横浜市史Ⅱ第三巻(下)』横浜市.

(ゆきむら まゆみ 大学院人間文化研究科博士後期課程)

Diffusion process of Pierced Earrings in Japan; Frame Analysis of Articles from Newspapers and Magazines

YUKIMURA Mayumi

Abstract

Pierced earrings are said to have been landed in Japan since the end of World War II. Pierced earrings are a rarely studied topic among young people. However, in the last twenty years, pierced earrings spread among not only the young but also other people. Using newspapers and magazines data from postwar Japan, this paper examines the data on diffusion of pierced earrings. As a result, this paper clarifies the transformation in the media's framing of pierced earrings.

This paper takes as its object of study 26 articles from newspapers and 227 articles from magazines, the titles of which contain the words "pierced earrings". In doing so, the diffusion of pierced earrings are divided into four frames: "piercing techniques", "risk of piercing", "pierced earrings of self-expression" and "pierced earrings of deviance". In the first frame, the articles tell how to pierce ear lobes safely. In the second frame, the articles report that piercing is risky behavior. In the third frame, the articles discuss pierced earrings as a symbol of youth and innovation. Finally, in the fourth frame, the articles discuss that such an adornment is a symbol of deviation especially among junior high school students and office workers.

In conclusion, this paper points out that the "risk of piercing" frame appeared at the beginning of diffusion. Next, "piercing techniques" frame appeared in the late-80s and early-90s. Inhibitive factors such as the risk of developing skin lesions and negative attitude towards injuring the body are disappearing, as a result, the articles in "pierced earrings of self-expression" frame and "pierced earrings of deviance" frame have increased. This paper suggests that the frame of pierced earrings shifts from body modification to personal adornments as a symbol.

(Keywords: pierced earrings, diffusion, body, fashion, frame analysis)